

して、一々カードにとられた抜き書きを手にしておられたのを見て、わたしはあなたの研究方法がいかに用意周到であるかに、今更ながら敬服を新たにしたものでした。

これらのお仕事は必ずや永く残るであろうことを疑いません。

あなたの大好きだったアナトオル・フランスは、『わが友の書』のデディーカーズで書いています。「私はその時分には、それほど人生を愛していた。恋する男のような信頼を人生に対して抱いていた。人生が私に対して苛酷になることがあろうとは、考えてもいなかった。とはいえ、人生は無慈悲なものなのである。それでも私は人生を咎めはしない」と、こう書いています。

人生は本質的に非情なものです。不条理なものです。かないものです。かなしいものです。しかし矩子さん、あなたは生きる日の限りを生き、力の限り運命と闘って来られました。内なる呼び声に従って、やむにやまれぬ仕事への情熱の赴くままに、あなたのヴォカシヨンに殉じられたのです。わたくしたちはただあなたの前に頭を垂れるばかりであります。どうか安らかに永遠の眠りに就かれまじようにと祈りあげます。わたくしたち、生き残っている者も、おそかれ早かれ、間違いなく、あなたのもとへ参ることになります。 (福岡大学教授、人文学部長。本稿は葬儀に際し弔詞として寄せられたものである。)

近藤矩子さんをしのぶ 三 浦 進

故人をしのぶ文は、生前に故人と親しい関係にあった人によって書かれるのが、ふつうである。ところが私は、近藤矩子さんの生前に、親しい関係にあったわけではない。福岡女子大学の同僚といっても、故人は既婚の女性であり、私は所帯持ちの男性であるから、かりにもふたりが親しい関係にあるとみなされたら、この女の園では、どんな噂が飛びかうか、わかったものではない。だから、私はその危険を避けて、故人と親しくつきあうことは、しなかった。家族ぐるみの交際なら、親しくつきあうこともできたであろうが、残念なことに、私が近藤さんのご主人やお子さんにお会いしたのは、お葬式のときが始めてであり、言葉をおかわしたのは、ひとことか、ふたことである。こんな私であるから、故人の家庭生活については、なにひとつ知らないのである。

私が知っている近藤矩子さんは、福岡女子大学という職場における同僚のひとりにすぎない。しかも、近藤さんはフランス文学、私はアメリカ史というように、研究者としての専門領域が、たがいに異なっていたため、私は故人と共同研究をしたり、学問上の論議をしたりする機会を、一度も持たなかった。彼女は一般教育課程に所属しており、その研究室が私と同じ四階にあったところから、ふたりは

教授会その他の職務的な会合で顔をあわせたほか、廊下や研究室などで立ち話をすることもあったが、大学内外の諸問題を語り合うなどということはなかった。近藤さんは福岡女子大学に五年半在職されたが、なくなられる前約一年は入院されており、この大学に元氣な姿を現わしていたのは、四年半である。その間、私は二年間を、アメリカ留学で過ごしており、したがって故人との、上記のような浅いつきあいは、二年半に過ぎなかったのである。

以上のようなわけで、私には、近藤矩子さんについて語る資格も材料もない。それにもかかわらず編集者が私に追悼文を書けというのは、彼女が福岡女子大学に就任したことや、この職場で死去されたことに、私も関係していると考えてのことであろう。

昭和四十一年、それまで非常勤講師で補っていたフランス語に、専任教員のポストができたとき、近藤さんはその職務に最初に就く人として迎えられた。それは画期的なことだった。なぜなら、彼女は夫と、まだ学齡前の一児を持つ家庭夫人であり、そのような境遇の人を、この大学は授業担当の専任教員として、これまで採用したことがなかったからである。しかし女子大生の将来を考えれば、職場と家庭を両立させうるような女性が、学生の指導に当たることは、まことに望ましいことであった。私をはじめとして近藤さんをこの大学に迎えようとした人々は、おそらく、

このような気持であったと思う。

しかしながら、近藤矩子さんの採用については、かなりの方が、ある懸念を持った。それは、彼女のような境遇の人が、福岡女子大学のような日本一小さい大学で、果たして勤まるかどうかという心配である。彼女は家庭では良き妻、良き母でなければならぬ一方、職場においては、すぐれた研究者および教授者でなければならない。さらには学生の良き相談相手であり、また教授会のメンバーとして、学校の管理や行政にも当たらなければならない。大きな大学なら、新任の教員などは、大ぜいの職員の中の、「その他大ぜい」の中に数えられ、彼女がどのように研究しているか、どのような教え方をしているかは、少数の人を除いては、気にもとめないであろう。学生との親密な接触の機会も少なく、学校行政などに携わることは、めったにない。気楽に研究や教授をすることができて、子供の病気その他、家庭的事情で、一時的に研究を怠ったり、授業を休んだりしても、それほどひどい非難は受けないであろう。

小さな大学は、これとは異なる。彼女の一挙手一投足は、すべての人の注目の的である。所帯が小さくて、つねに顔をあわすところから、人々は見えて見ぬふりができず、悪意からではなく、むしろ善意から、助言したくなるのである。彼女は就任のその日から、研究、教授、学生の指

導、そして、ぼう大な量の、いわゆる雑用に従事しなければならぬ。そして、これらの仕事を少しでもなおざりにすれば、多くの人が非難の聲があがるであろう。構成員の数が少ないところから、各自の仕事の量は大きく、ひとりでも仕事を怠る人がいれば、他の人の負担や不便が、なお大きくなるからである。小さな大学の職場は、家庭の仕事ですべて妻にゆだねて顧みない男性には勤まるけれども、家庭を持っている女性には、よほどの努力や意志力がない限り、勤まるものではない。福岡女子大学が良き女性を育成する大学でありながら、情けないことに、教員に既婚婦人がほんのわずかしらないのは、こういう理由からと思われる。こんな職場に、近藤さんのような、幼い子をかかえた女性が、果たして勤まるであろうか。このような気づかいから、かなりの人が近藤さんの採用には反対であったと思う。

その気づかいは、現実のものとなった。彼女はこの職場に、朗らかに、楽しく勤めはじめた。しかし小さな大学の職場は、明朗や快活だけでは不十分な、きびしい世界だった。そこは、善意の人々から成り立っている民主的な共同体ではあったが、村落共同体における生活のように、共同的規制の圧力を強く感じ、対人関係に予想以上の気苦労をしなければならぬ場所だった。彼女はそれを知って、努力したと思う。しかし、ここでは、ふつうの努力では不

充分であり、また、彼女の気苦労も、この職場に慣れた人々にとっては、お嬢さんじみたものに思われたかもしれない。彼女が病気になる、死に至ったのは、これが原因であるとは決して言えないけれども、彼女にとっては過大であった努力や気苦労が、ある程度、故人の心身に作用して、そうなる運命を早めたのではないか、というような気がする。もし近藤さんを福岡女子大学の教員に採用していなかったら、彼女は幸福な家庭夫人として、朗らかに、楽しく、生きのびたであろうなどという仮説は、科学的には言えることではない。しかし、そんな考えが、なんとなく浮んできて、彼女の就任に賛成した者として、心苦しく思う。そして、職員の過大な労力と協力によってはじめて大学らしさを保つことができる小さな大学というものに、腹立ちを覚える。この大学は、もう少し大きなものにならないければならぬ。

近藤矩子さんが残っていたアナトール・フランスの『ペンギンの島』の翻訳（中央公論社「世界の文学」第二十三巻、昭和四十五年三月発行）を読んで、うまい訳だと思う。私自身、現在、あるアメリカ人の歴史書を翻訳中であるが、いくら書き直しても、良い日本語にならない。近藤さんの翻訳は、みごとな日本語になっており、これだけの訳をする彼女の語学力や知識力は、相当なものだと思う。しかも、全国的に学園紛争がさかんだった時期に、学

生部委員として夜遅くまで学生の相手をし、家に帰っては、ご主人やお子さんの面倒をみ、ご主人が病気で入院されたときには、その看病をしながら、四百字詰原稿用紙で八百枚にも及ぶ翻訳をなしとげられたことを考えると、頭の下がる思いがする。私には、とてもできないことだ。このような人を失ったことに、つくづく、人生の無常を感じる。

(本学教授・文学部長)

近藤矩子さんを惜しむ

石 本 キ ミ

近藤矩子先生が福岡女子大学のフランス語担当のはじめの専任者として就任なさったのはついこの間のことのような気がするが、あれから六年の歳月が流れて行った。当時の女子大はまだ古い木造校舎で、しかも国道3号線幅員拡張のためわれわれの研究室のあった第一棟は車の音に悩まされていた。冬ともなれば北風の吹き込む部屋で小さい電気ストーブを前にして先生と私は互に肩を寄せ合ってお弁当をご一緒したりお茶をいただくことが屢々であった。そんな時矩子先生は仕事に生きることの喜び、そして研究への尽きぬ情熱を眼に輝やかしながら披瀝なさった。おたがい主婦であり母親であることが生じさせる研究職との齟齬を啣ったり励まし合ったりしたものだ。

しかし彼女の廿世紀フランスの主知主義的、自由主義的傾向は十九世紀のイギリス的な常識派の私を驚かすこと屢

々であった。彼女のそうした傾向の中に、そして若さの中に、砥ぎすまされた冷徹な知性と、その無限の発展の可能性を認めて、頼母しくも羨ましくも感じたことである。

矩子さんが幼時から終戦までを過ごされた旅順や大連は私にとっても故郷のような場所であるのでそれもよく話題になった。私の父は関東州租借直後の旅順、大連を活躍の舞台としていたのでロシア人が建てた館で私たち一家はお伽話のような生活をしていたことや、邸の周囲に聳える七八十本のアカシヤが遅い春には一斉に白い房を揺がせて薫風をそよがせた。父は黒塗の馬車でお役所に通っていた。そんな他愛ない話になつかしそうに耳を傾けて下さり彼女の記憶の中より新しい満州の生活を語って下さった。花に詳しい人は「あれはアカシヤではなくて、にせアカシヤですよ。ミモザという黄緑の小粒の花をつけるあれが本当のアカシヤですよ。」などと注意して下さるが、矩子さんと私にはアカシヤへの、「アカシヤの大連」への、そして私たちにとってアカシヤが象徴する爆発的に咲く満州の春の花々の美しさ、夢のように仕合せな少女時代への追憶のすべてであった。たとえ学名であっても「にせアカシヤ」とは冒瀆である。

福岡女子大に新校舎が与えられ四階に近藤先生も私も城を構えることを許された。研究室は私たちが望めるかぎり可成りよい環境のサンクチュウムである。もし矩子先生が健康